

昭和五十四年七月二十三日 第三(郵便物認可) 行(毎月一回・十五日発行)

(通三二二号)

慈

光

第二十八卷

第四号

次

目

真宗教証……………近角常観……………(1)	久遠……………福島政雄……………(7)	福島先生を偲ぶ……………西元宗助……………(9)	一道会の記(続)……………榊原徳草……………(12)	一条の光……………田辺昭……………(16)	念仏詩抄……………木村無相……………(19)	私が問題である……………花田正夫……………(22)
-----------------------	---------------------	--------------------------	----------------------------	-----------------------	------------------------	---------------------------

真 宗 教 証

近 角 常 觀

親鸞聖人御一代のお教化は、此の「教行信証」の外にない、これは実に聖人御製作の根本聖教である。併しながら聖人のお言葉で頂く時は、その教行信証ということは聖人御自身が発明なされたものでなく、御師法然上人のお教化がこの教行信証の外になかったのである。故に聖人の『正信偈』には、

本師源空仏教を明らかにし、善惡の凡夫人を憐愍せしむ
真宗の教証を片州に興し、選択の本願を惡世にひろむ
と申されてある。法然上人御一代のお教化は真宗の教証を

日本に興し、弥陀選択の本願を五逆惡世に弘めて下されたその外はないと聖人はお喜びなされたのである。その法然上人より頂かれた教行信証を、又我々は今までお互に頂いてきたのである。で真宗の教行信証ということは聖人から言えば、法然上人より伝えられた真宗の骨目、又我々より言う時は、聖人から頂いた一宗の骨目であります。

龍樹菩薩の易行品に、一代仏教を難行道と易行道との二つに別ち、易行の一道によつてのみ、我々は行く事が出来るという事を示されてある、これはかつて仏教全体の上から

話しました。今もすこし事の筋道をたどって話そうと思います。

易行道は仏教全体の味を、唯念仏の一法で頂くという念仏三昧、一行三昧の教であるが、そもそもこれは如何なる具合で出来たのであるか、換言すれば親鸞一代のお教化を後世のこうに容易に頂くようになった發達とでも申しましょうか、前の講話ではこの点からお話したのである。併しながらこのように広大無辺の一代仏教を唯南無阿弥陀仏の一つで頂くということは、本来仏教にあったことであるか。或はまた無かった所のものが後に到って出来たのであるか。先ずこの源からきわめて来ねばならぬのである。

歴史的の研究はどうあろうとも、この他力の念仏は我々が仏法を頂く上になるべく頂き易いように、自然に發達して出来た便利のための念仏ではない。その根本は次の一言である。即ち法然上人の『選択集』中に、念仏の一法は自然に來つたものではなくて、もと阿弥陀仏のお手許に於てこの念仏の一法をもつて一切の衆生を救うとの深重の本願がある、この本願から願われ來つた念仏である、と仰せられてある、これです。

その選択本願念仏というのはどうかというに阿弥陀仏が一切衆生を助け給うに如何に誓いたまいしか、修行や戒行をもつて助けると仰せられぬ。唯念仏の一法、南無阿弥陀仏

一つで助けると、特に念仏一つをおえらび下された。極言すれば修行でも助けぬ、戒行でも助けぬ、礼拝や讃歎でも助けぬ、唯念仏の一つで助けるとの、もともと仏の本願のお誓いである。その仏の本願のお恵み、その御親心、五劫のご苦勞、永劫の修行、仏の慈悲、智慧、光明、これ等のすべてが凝つて仏の本願、南無阿弥陀仏の一行が出来あげて下されたのである。

故に、一念我々の身にこの念仏が頂けて見れば、今に到つて初めて願われ給うた念仏でなく、大悲の親のおおもとにおいて、我名を称えしめ、知らしめ、衆生の心に届け入れて、一切衆生を救わんと既に發願のはじめから我々衆生のために選択して置いて下された念仏である。この切なる大悲の御親心の根本が即ち選択本願であります。

成程、親尊一代の教法、一代仏教を出立点として考える時は、一代仏教から來つた念仏には相違ないが、もう一步源にさかのぼってみれば、すでに永劫の昔に仏が十方衆生に向わせられ、其哀々たる大悲より、此念仏を届けて仏の恵みを知らしめんとの本願である。念仏はもうこの時すでに我々の上に与えられてあったのである。而してこの本願、恵み、慈悲、親心、御苦勞こそそもそも仏教の根本、仏陀の根本であります。

一仏即一切仏という時は諸仏の境界は皆夫々同一である

ようにも思われます。けれども阿弥陀仏の本願から言う時は、諸仏のさとり境界も、諸仏の夫々の説法も外のためではない。唯この阿弥陀仏の本願の恵みを知らせるがために夫々の諸仏となつて現われて下されたのである。般舟經の中には

三世諸仏は弥陀三昧を念ずるによつて等正覺を成ずとある。又聖人の和讃には

弥陀の淨土に歸しぬれば すなわち諸仏に歸するなり
一心をもちて一仏をほむるは無碍人をほむるなり
ともあります。弥陀一仏に歸する事は、即ち十方の諸仏に歸する訳であるとはどうかいうに、華經の文に

法王は唯一法なり。十方の無碍人一道より生死を出でたまえり、一道とは一無碍道これなり。

とある。一無碍道とは念仏無碍の一道であります。十方の諸仏は皆この念仏の一法によつて広大なる仏陀の境にお出なされたのである。故にその十方諸仏は亦阿弥陀仏の本願の親心を十方の衆生に説き聞かせて下さるより外はない。故に阿弥陀仏の第十八願は十方の衆生に我名を称えしめて悉く救わんとする根本の本願であるが、先ずその本願を十方の衆生に知らせんがために、仏は第十七の願において
設け我佛を得んに、十方世界の無量の諸仏ことごとく
咨嗟（しさ）して我名を称せずば正覺を取らじ。

とお誓い下された。これは十方無量の世界において吾が本願を言い放たしめ、念仏を知らしめて十方無量の衆生をことごとく救わしめん、との大悲大願である。今日はその南無阿彌陀仏の一法は釈尊がこの世に出で給うて始めて来たのでなく、またその後で発達して来たのでもなく、もともと阿彌陀仏の選択本願の念仏であるという事を申上げたのである。即ち阿彌陀仏が念仏の一法をすでに先天的に――若し先天的という言葉が用いられるならば、先天的に念仏の一法を定めておいて下されたのである。その先天的に念仏の一法をもって救うとのお恵み、御本願が選択の本願であります。しかもその南無阿彌陀仏の意を十方衆生の心に届けしめ、知らしめ、称えしめ、そうして十方衆生この名字を称えんものは、ことごとく我浄土へ迎えとらんとこの廣大の本願である。この本願こそ実に我々が救われる根源であります。

釈尊御一代八十年の間、或は華嚴經において、廣大なる仏陀の境界をお説き下され、又涅槃經を説かれては如来常住、無有變易の教をお遺し下された。けれどもこれを要するに親鸞聖人の信仰より言う時は、一代經中如来とあるは阿彌陀如来の光明を指差されたのであり、慈悲とあるは阿彌陀如来の慈悲を示されたのである。一代藏經にありとあること、皆この阿彌陀如来の廣大の恵みをお説き下された

とお説め下された。併しながら此等は皆釈迦法と言つて、釈尊御自身の教法をお教え下されたものである。釈尊が此世に出興して下された真の結局は、唯この本願、南無阿彌陀仏の一法を我々に知らしめんためのお導きに外ならぬのである。我々はここをよくよく頂かねばならぬのであります。それで釈尊一代の教法中より真実の教を拾う時は、実にこの大無量壽經一部である。聖人は教行信証『教巻』のはじめに、次のように仰せられてあります。

夫れ真実の教をあらわさば即ち大無量壽經これなり。
この經の大意は阿彌陀誓いを超発してひろく法蔵をひらき、凡小を哀れみて選んで功德の宝を施すことをいたす。釈迦世に出興して道教を光闡して群萌をすくい恵むに真実の利を以てせんとおぼしてなり。ここを以て如来の本願を説くを經の宗教とす、即ち佛の名号をもて經の体とするなり。云々。

そもそも大無量壽經は真実の經である。佛の根本、阿彌陀仏の本願を説いてあるが故に真実の教であります。なお進んでこの意味から世間の學問に志す方々のために、殊に宗教哲學等を研究なさる方々のために一言申しましょう。上に言うように一代仏教には沢山なる種々の法がある、或は道德を奨励した教法もあれば、又山間に隱遁せよという厭世的な教法もある。けれどその肝要は佛陀のさとり境界

に外ならぬのであります。

しかして殊に大無量壽經は、この阿彌陀の本願を正面よりお説き下された經であります。今さらに申すまでもなく阿彌陀仏の本願の大本を明らかにして下されたお經が実にこの大無量壽經である。親鸞聖人の教行信証の教は実にこの大經から来ったのであります。一寸考へる時は、沢山な一代仏教中において、阿彌陀仏の本願一つが真実である、他は皆不真実であるという、甚だわが仏貴しめ、唯一方の様にきこえますが、併し親鸞聖人の信仰より言う時は、唯一絶対の阿彌陀仏の本願こそ実に全仏教の根本である、十方諸仏稱讃の阿彌陀の本願である。大聖釈尊のこの世に出興して下されたのも唯この本願海を説かんがためであるとなるのです。聖人は『正信偈』において宣わく、

如来世に興出したまうゆえんは、唯阿彌陀の本願海を説かんとなり。五浊惡時の群生海、まさに如来如実の言を信ずべし。

又無量壽經の中には、釈尊自ら仰せられて曰く、如来無盡の大悲をもつて三界を矜哀し給う。世に興出し給う所以は、道教を光闡して群萌をすくい恵むに真実の利をもつてせんと欲してなり。

とあります。勿論釈尊は色々の教法をお説き下された。或は修行をせよと勧められ、或は戒行を保つ事が必要じゃ

より罪ある人間の世界を眺めて、罪あるものを救いあげる処が実に佛教の根本、否すべての宗教の宗教たる点であります。而してその根本の肝要の顯われたのが阿彌陀大悲の本願力である。如何にも華嚴經の中には廣大なる佛陀の境界が説かれていて、又涅槃經のお説法はとうとい。けれども此等は皆宗教の要点でない。又人間の立場から考へて如何程道德を説いたところが、人間の立場から来た道德故所詮駄目である。宗教の肝要、仏教の仏教たる所は、かかる人間の道德や、又廣大なる境界をお説き下された点ではなくてこの廣大なるさとり境界から大悲の親心を告げて下さる罪に悩む我等を救い取って下さる御本願こそ実に仏教の至極、宗教の極致であります。以上は特に宗教を學術的に見て居られる方のために申したのである。

されば釈尊は徒らに親の財産を陳列して見せて下されたのではない。この哀れな十方の衆生に如来の本願を教え、久遠劫来待ち受け給はる切なる大悲の親心を告げて下さるが実に大聖出世の御本意であつたのである。そこで聖人は直ちにこの点を喝破して「釈迦世に出興して道教を光闡して群萌をすくい恵むに真実の利を以てせんと欲す」と仰せられたのが誠に有難い。

前より度々くり返すように、釈尊を本として、一行即一切行、一佛即一切佛という具合に阿彌陀の本願念佛一行を一

代仏教より味わうことも出来る。が更に進んで根源にさかのぼって見れば、阿弥陀仏がすでに十劫の昔において正覺を御成就なされ、五劫の間思惟して深重の誓いを超発して下され、永劫の間修行して弘く法藏をひらいて、選んで功德の宝を施して下さったのである。選んで功德の宝を施して下されたとは、南無阿弥陀仏の一名号の宝をえらび我々を救うて下さることである。これぞ実に佛教の真髓、他力信仰の根源、真実の教である。

真に真実の大利である。和讃には

恒沙塵数の如來は 万行の少善きらいつつ

名号不思議の信心をひとしくひとえにすすめしむ

ともある。この名号不思議の信心の外は何を為すとも万行の少善である、唯この無上宝珠の名号一つが阿弥陀如來選取撰取の眞の宝である。なおも一つ言う時は教行信証の四つながらがこの弥陀佛本願の外はないのである。この点より言う時は何もこれが教である、これが行であると区別して言う必要はないのである。それ故弥陀の本願は大經の宗教であり、南無阿弥陀仏の六字は大經の体である、この外に大經は無いのである。これを教えて下されたのが真宗の教であります。然し今一步広い意味で云えば一代仏教は何処を見てもこの南無阿弥陀仏を説いてないところは無い訳なのである。けれども特にこの大經において佛は真実の佛

ならぬのである。親鸞聖人八十八歳御往生前の自然法爾章の初めには、

獲の字は因位の時うるを獲という、得の字は果位の時きに到りてうることを得というなり、名の字は因位の時きのなを名という、号の字は果位の時の名を号というなりと仰せられた。これは何かというに、五劫兆載永劫のご修行の結果は唯この一仏名である事を知らせて下されたのである。從來真宗の説教で阿弥陀仏が五劫兆載永劫のご修行の結果南無阿弥陀仏をご成就下されたというのはここである。大もとに逆のぼって法然上人の選取本願をご唱導なされた書き振りに頂いて見ると、阿弥陀仏の法藏比丘の昔平等の大悲に催されて布施持戒をもって本願となさず、唯念仏を本願となすとする。

(未完)



教の根本、弥陀大悲の本願をお説き下されたのであります。さて次にこの真実の教より真実の行が来るのである。行というのは云うまでもなく南無阿弥陀仏の一行の事である。これはどうかと云うに、すでに名号をもって教の体とせられてあるのです。大經において長々と説かれたのは、唯この一仏名をお説き下されたのである。十方三世の諸仏も第十七の願より顕われて、唯この南無阿弥陀仏をおほめ下されたのである。この大經一部の本体である南無阿弥陀仏の一行、これ実に我々が助けて頂く基礎である。そこでまず教の次に此の南無阿弥陀仏の他力大行が顕われて来たのである。

なおこの味を今少し申しましょう。上來云うが如くで、仏教の真実の教というは根本阿弥陀仏の本願である。その阿弥陀仏の本願は如何なる本願であるかと言えば、選んで南無阿弥陀仏の一行を与えて下されたのである。修行によるでない、戒行によるのではない、唯この南無阿弥陀仏をもって救わんとお誓い下されたのである。大聖釈尊の一代の教法がすべて各方面からこの念仏の一行をお伝え下されたのであるのみならず、十方の諸仏も唯この一行を称讃するために出現下されたのであった。それも根本の弥陀仏の本願が南無阿弥陀仏の一行であるからである。五劫思惟、兆載永劫のご苦勞の結果も唯この南無阿弥陀仏の一行に外

人類誕生のナゾ追うて

一九二四年、南アフリカで「タウングス・ベビー」と呼ばれる二百万年前の黎明期の人骨を発見、人類進化史に大きく貢したレイモンド・ダート博士は云う

「およそ二百万年前、サルは二本足で立って歩き出し、あいた両手でこん棒をつかんだ。この武器で他の獣を殴り殺し、肉を食った。

これが誕生期の人類の姿であり、今日の人類のあらゆる問題もこの性質が基本となっている」と。

孔子は「聖人は独りをつつしむ。小人閑居して不善をなす」と。そこに私自身の小人の姿を見せられたが、我々小人、凡夫は、閑な時があっても、それを利用出来ないで、不善のことばかりをはじめ、丁度両手のあいた原始人が他を殺害して食料にしたように。

しかもダート博士によれば、今日の人類のあらゆる問題もこの性質が基本となっていると警告しているが、大きく考えさせられる問題であると思う。

久 遠

福島政雄

久遠という言葉は今日多くの人々によってつかわれてゐる。これは永遠とか無窮とかいう言葉と同じく吾々にとつては日常の用語であつてその意味は言うまでもなくわかりきつて居ると吾々は思つて居るのである。

併しながら意味がわかつて居るといふことと、その感じを持つといふことは別事である。久遠といふ言葉の意味はわかつて居ても、久遠の感じといふものは容易に持ち得るものではない。久遠の感じを持つといふことは人間の心の深さと比例することである。人の心が深くなれば久遠の感じが自然に湧いて来るものである。或は又一の国民であればその国民の偉大性と平行するとも言われよう。偉大なる国民は久遠の感じを持つことが深く、したがつて目前の浅薄なる事相に迷ふことはないのである。

久遠の感じは生命の深さの感じである。悠遠なる過去といい、無窮の未来と言つても現在の生命の深さに即するものである。生命の深さは蓄積せられたる豊かなる要素を統一しようとする苦悩に即する。生命の要素がただ豊かであ

るというだけではその深さがない。或はまた豊かなるものが自然に調和しているという有様であつても生命が深いとは言われない。矛盾の苦悩を通して生命の統一を達しようとするところに生命の深さといふものがあるのである。

凡そ吾々の生命は矛盾する要素を多く持つて居るものである。人間であるといふことは矛盾する要素を持つといふことであるとも言われる。その矛盾が複雑であり痛切であればあるほど生命の深さは増して行くのである。古代の偉大なる芸術家や宗教家は何れも深刻なる矛盾を持つて居た人々である。その矛盾を一種の陶醉によって忘れようとする傾向を我々は持つて居るが、それは吾々の浅薄なる芸術的傾向とも称すべきものである。佛教においてはこれを解慢界と称する。

解慢界といふのは陶醉によって心に緩みを生じたるがために生命の深さを感じないようになる境界である。従つてこの境界にあるものは現実を浅く見るのである。現実の生活を成す所以の生命の要素に矛盾を感じないのである。故に姑息なる泰平の心境に住して解慢の洞窟に安眠を貪り真剣なる人間の歩みから遠ざかつた生活をするものである。現在に耽溺した生活をするものである。

この解慢の洞窟より吾々を呼び醒すものは何であるか。それは多くは思ひがけない實際問題である。突如として起

ることであつても、徐々として起ることであつても、大きなことであつても小さなことであつても、機縁に応じて實際問題が吾々を覚醒せしめるのである。所詮事上「機縁」というのもこの事を云うのであるが、機縁は実に不可思議であつて、如何なる些細なる問題であつても覚醒の縁となり得るのである。

一たび醒め来れば、紛々たる現実生活上の矛盾要素が痛切に感ぜられ深き苦悩がおこつてくる。ここに現代の問題がそのままに久遠の問題となつて来るのである。

しかしながら苦悩は吾々の歓迎するものではない。久遠の問題を逃避して現在刹那の耽溺をむさぼろうとする強い傾向が吾々にある。そこで目ざめたるものの努力を必要とするのであるが、空虚なる努力は決して長く続くものではない。ここに退転の危険が刻々にせまるのである。退転せずして不断に久遠の問題を把持するためには心にうるおいがなければならぬ。その心のうるおいの世界が宗教の世界である。

宗教は久遠の問題を親心の光の下に感ずるものである。久遠の感じを単に冷かなる心をもつて感ずるのでなく、暖かき生命の事実として感ずるものである。苦悩に覚醒して親心に帰依するとき吾々には苦悩の中に安住する境地が開かれる。しかしして親心こそは久遠なるものであると感ずる

親心は久遠の暖かいのちそのものである。それは吾々が両親を御縁として最も深く感ずるものである。ひたひたと吾々のいのちの上に感ずるのであつて、この感じにおいて親のいのちに久遠のまことを仰ぐのである。聲々念仏というのもこの境地である。

久遠のまことを仰ぐとき吾々は苦悩の中に安住して苦悩そのものが融化せられて行くことを感ずる。誠に久遠の親心にひたることによつて人生は久遠の道場と感ぜられて行く。かかる久遠の感じこそは吾々を如何なる困厄の中においても進ましめるのである。その進みは努力の進みというよりも精進という方がふさわしい。静かなる心をもつて不断に進み行くもの、これが久遠の感じにはぐくまるる吾々のいのちの進みである。

昭和十七年三月六日。『こころ』



福島政雄先生を偲ぶ

西元宗助

二月五日の朝おそく、なにげなしに新聞に目をやると、ハッとした。福島先生が去る二月三日午後ご逝去、五日葬儀と報じられているではないか。

この二、三年、ご老衰で寝たり起きたりしておられたがそれでも年末には、ご自筆のご返事をいただいたりしたので、それほどとは思ひもなかった。ともかく、ガク然として上京の準備。先生のお宅には電話がない。お病気がちの奥さまはどうしておられるやら。それに長年入院の昭雄（次男）さんたち。あまりにも痛ましくて、目をつぶりたいような気持で新幹線に乗る。

○
顧みれば先生との希有のご縁は、昭和五年の秋にはじまる。当時、京都大学の教育学の学生だった私は、たまたま先生の「教育の理想と生命」及び「宗教的自覚と教育」を読んで電撃にうたれたように心ゆさぶられ、当時、広島文理科大学教授であられた先生に拙書を呈した。それが先生との師弟の縁のはじまりである。

ていられるんだから、頼むよ。まア今晚は飲み給え」と。わたしは、このとき、先生の絶交状のうえに、大無量寿經の「唯除」の大悲を感じしたのであった。

○ ○
先生の教育学上の業績は、一には大乘仏教を基盤とする、教育の本質の根源的研究であられる。それは処女作「教育の理想と生命」にはじまって、晩年の「教育生命の原理」にいたる。これらは、わが国教育学界において最も異色ある独創的生命的なもので、それだけに不朽の価値をもつ。二には先生の学位論文となった「ベスタロッターの根本的研究」である。それにソクラテス及びプラントンを中心とした希臘教育史の研究も、わが国の教育学界においては先駆的なもので、これらは先生の五十才代において一応は完結する。三は、聖徳太子を中心とする日本教育史の研究で、これは四十才代後半から晩年に及び、著作としては「日本教育源流考」の大作に始まって、最晩年の「日本家庭史と教育」にいたる。

いずれにしても、先生の学問的業績は多面にわたり、しかもそのいずれもが、かくの如くに第一流であられた。しかし、先生の晩年は、人の知る如く極めて不遇であられた。戦後の社会的混乱とそれに伴う運命的御不幸―御子さんの病氣は、まさに悲劇的であった。しかし又それだけに、

爾来、学問と生活のうえにおいて指導をうけ、ついに満州に建国大学の創設されるや、森信三教授（福島先生の高弟）のご配慮のもと、先生は教育学の主任教授（尤も広島文理科大学との関係で最初は集中講義の講師）、そして私はその助教として赴任した。

しかし、凡庸な私に、先生はまもなく悉く失望、いや絶望していかれた。それは今なお慚愧にたえない。広島の大に深く期待をかけておられた。それだけに先生の失望と幻滅は大きかった。じっさい先生の、私にたいするお心持は、涅槃経にある世尊の阿闍世に対する「世尊の大慈悲、衆のために苦行を修し給うこと、人の鬼魅（きみ）にくるわされて、狂乱し所為多きが如し」（教行信証・信卷末）そのままであった。

げんに先生は、あるとき突然、絶交状をよこされた。破門されたと深く悲しんでいると、忽然とわが家の門に立っていられる。それで日本内地に帰った折、雑誌「渾沌」（福島先生中心の教育誌であったが、戦時中、「自照」に併合さる）の編集者で、先生の愛弟子の故・柳川重行先輩に、思いあまって打明けると「君はまだタッタ二回目か、僕なんか数えきれぬほどだよ。先生の絶交破門の宣言は、要するに愛着の表現。ともかく先生は、それだけ君に期待し

先生の内面界はいよいよ深まっていた。

○ ○
先生は熊本の産。五高を経て東京大学文学部にて教育学を専攻されたが、ここで命（いのち）の師、近角常観先生にあわれて、鮮やかに本願他力の真実に廻入せられる。さらに広島時代以降は法隆寺の佐伯定胤親下及び臼杵祖山師に、次いで足利浄円先生にも深く親近せられることになった。なお広島時代の先生のお歌が、先月号の『自照』の野間景豊大士日記抄にあるのを拝見して、その不思議なえにしに驚いた。その歌は、

くるしみのいのちの底に照りとほる

このみ佛のまことまします

○ ○ ○
地上でのお別れの御火葬は、東京都杉並区の堀之内において行なわれた。ついに告別式に間にあわなかった私は、一時間余、小雪降る中をさらにタクシーを飛ばし、漸くにして火葬場にだどりついたのである。その控え室に安置されてある先生のお写真に拝礼したときは慚愧々々。とめどもなく涙がながれて、どうすることも出来なかった。

それから御遺族の奥さまをはじめ、御長男、住雄君夫妻（青森県果樹試験場長）、三男、邦雄君夫妻（静岡大学理学部助教授）、四男、治雄君（自営）等に弔問と挨拶をか

わしていたが、通知があつて、ついに仏骨を拾ねばならぬときがきた。重誓偈を唱えさせていただく。

先生の御法名は、求道院釈界雄。享年八十六歳。つっしんで、この小文を記し奉る。

追記

東京から帰宅してみれば、奥さまからのお便りが、わたしの上京直後に届いていた。もう一日早く届いていてくれたらと郵便子を恨めしく思わないでもなかった。五日間もかかっているのですから。勝手に奥様のお許しを願つて、その全文を掲載させていただく。

新春のお慶び申し上げます。新年にはお品とおたより頂き有難う存じました。お内皆さん、おさわりなく御加年なさいました御様子、何よりお悦び申し上げます。先日は又結構なお菓子をお送りいただき、何時も何時もお心にかけて頂き何とも御礼の申上げようありません。何とも云えぬ風味があつておいしく戴いています。先ず主人に小さくして頂かせました。その後はもはや流動食ばかりになり、それも牛乳など五さじ位がやっとになりました。眠りつづける時間が多くなりました。いよいよ別れの覚悟をきめねばと思い乍ら介抱をつづけて居ります。

一道会の記(続)

柿原徳草

続いて向島諦宣先生のお話は次のようでありました。

○
御指名によりお話させて頂きます。今もお話下さったように、松本先生に毎年此所でお会いしお話を聴聞したのですが、突然お亡くなりになり、もうお姿を見ることが出来ない、悲しいことになりました。花田先生から詳細にお話がありましたが、松本先生は胸には強い情熱を秘めて居られますが、外見は非常に温厚な方で所詮目立たない方でありました。私自身も御生前はこれといった感じはもっていませんが、今になって考えさせられて見ますと大きな存在だったと思うのです。

私も先生がまだ鷲岳という姓だった学生時代に一諸に知四明寮で生活して居ったのです。もし松本先生が居られなかったら花田先生と松本先生の縁もなかった。本当の念仏を知四明寮に伝えられたのが松本先生であつた。そこで池山先生との御縁も出来ましたというのをこの頃つくづく

昭和五十一年二月一日
東京都世田谷区上北沢五ノ三八ノ六

福島農婦

(編者註) 自照誌三月号より転載させて頂きました。

病中記

足利浄円師

病める身のころぼそきがなかなか 法をよるこぶえにしとはなれ

闘病といつていきり立つのでない。病は病として病に親しみつつ、病むところをいたわりつつ、思ひはいつも人生の一大事因縁にはせている。

「枯草の露」より

思います。松本先生は我々の念仏生活に重大な関係を持つた方だったので。今にして始めてこうしたことを思い起すわけです。それまでは先生の御恩ということは反省もしなかったのですが、誠に申しわけのないことでありまして御生前に報恩の少しでもなし得なかったのを慚愧にたえないと思うのであります。

実は私も寺の生れで一ヶ寺の住職をしているのですが、子供の時から念仏の中に育てられながら本当の念仏ということを知らずに大学まで卒えましたが、こちらから求めようとしなかったのに、松本先生が寮に來られ、花田先生と共に念仏せられるようになり、自然に京都学生親鸞会が結成されました。

そして山口玄洞師の会館で信仰の告白会があるというので寮生十数人の皆様に誘われて、別に何ということなしに参会しましたところが、そこで花田先生の信仰告白を聞きました。声涙共に下る熱烈なお話で、私はその姿を見ているうちに、これは仏様だ、人間ではない、何か菩薩がそこに獅子吼していられるというような感じを受けたのです。知らぬ間に私は高声念仏しているのをフツ気付きました。それまでそんな高声念仏したことは無かったのです。それから一緒に寮に帰ってきましたとき、花田先生が何か納得いかぬ所はありませんかとお訊ねになりましたが、有難う

ございますと申すばかりでした。それから横田先生のお話を聞き、池山先生のお話を聞き、ことに池山先生のお宅には何度もお邪魔させて頂き、そういう不思議な御縁で今日まできたわけであります。

私自身もう古稀になり、七十七歳の祝宴を西元様や皆さんで張って頂いたんですが、この年になってただ碌々と生きていくだけです、この頃切実に死ということを感じるようになってまいりました。

仏教は、若い人も集ってくるのに、死ということを書くのはどうか、もっと現代風に仏教を説くこともあろうと云う人もあります。そういうこともあります、佛教は生死の問題を離れて無いわけで、生死出すべき道、解脱ということが、佛教、特に親鸞聖人の教えの中心ではないかと此頃考えるのであります。生老病死、特に老死ということがなかったら本当の宗教というものは要らんのじゃないか、生れたものは生長して遂に死んでゆく。いつまでも生き続けたいの生物のもつ本能でしょうが、それがかなわぬ、どこかで打ち切られる。その解決は宗教の外には出来ぬ。お釈迦様は小国であつても一國の太子で思うことは何でもできた。人生から言えば最高の幸福に生きておられた、此の世では別に求むべきものは持たれなかった。それを敢えて捨てて出て行かれた、それは矢張り生死が問題で、これ

居ります。いつかも申しましたが、南無阿弥陀仏とは私なのでこの肉体は亡びてゆくが、その肉体を包んで、南無阿弥陀仏が永遠に死を乗り越えて、死もまた我、そういうように思うのです。

私がこれから死んでゆくとします、何処へ行くのか、又どこへ行きたいのか、これは歎異抄に聖人が「ちからなくして終るとき彼の土へはまいるべきなり」と、そういうようにしてお浄土へまいらせていただけるのだと聞かされていますが、私が死ぬ間際に往きたいところは、すでに亡くなった私の父母の居るところへ往きたい。父母が私にとつては具体的な仏様だと思います。

父は私の十九歳の時に亡くなり、もう五十回忌も終わっていますが、私が三高在学中の二年生の時の二月十五日ですスペイン風邪で亡くなりました。世間的にはこれという人物ではなく、又経済的には常に母を泣かせていましたが、お念仏だけはよく申して居ました。父の念仏の師は利井鮮明師であつたのです。とにかく念仏の絶え間のない父でした。危篤の電報がきて京都の学校から帰ったのですが、その十日前に父は京都に来て西大谷の御廟にお参りしました、道で話すことが皆遺言なんです。私が死んでも学校をやめるなどか、私がその頃ボートの選手をしていましたが、あれは身体に悪いからやめよ、など言いました。今でも

が御出家の最大の動機ではなかったか。

伝説にもありますように、生、老、病、死の四門出遊のお話のように、自分もいつか老と死はのがれられぬと、そこに気付かれて愕然とされたとあります。伝説ではあります、が、そういうことが最大の動機ではなかったか。私が死んでゆくということです。この死という苦からどうして脱がれるかということが仏教の根本問題であると、近頃思うのであります。

花田先生も同じ病氣を持って居られたようですが、私も十年来、狭心症の氣があり、今でも胸の氣持が悪い。今まで四年間はずっと薬を飲み続けて仕事をしていたわけです。いつ倒れるか知れぬと近頃特に思うのです。今年は幸いこの一道会に出席できましたが、松本先生は今年は見えないように、私も来年のことは一期一会で期し難いのであります。皆誰れもそうなのですが、はつきり自覚しないだけなんです。いつか「慈光誌」で、花田先生は死に係るような重病をなさつて、その時に「死もまた我なり」と死を乗り越えたとあります。これは非常に大きなことで、死もまた我なりという我れは、これは普通の私ではない、生死を越える我れは我にして我ならぬわれの力、南無阿弥陀仏であらうと思います。南無阿弥陀仏が私になって下さつて「死もまた我なり」と。そのように私は味わはせて頂いて

覚えていますが昔の京都駅、そこへ私は父を送りにまいりました。すると父は、門限に遅れるから帰えれという。それでは帰りますと帰えりかけると、一寸、と云う。何ですかという、イヤ別に用事はないと。そんなことを二三回繰り返しました。何となく別れたくない氣持があつたのだと思います。その十日後に危篤の報せを受けたのです。帰つた時は意識がまだあつたようですが、苦しんでいました。私がそこに坐っていますと、虫の息の下で歎仏偈「光顔巍巍、威神無極……」を唱えています。それを聞いていましたら「病氣が感染するから彼方へ行け」と云います。やむなく私は台所の方へ参りました。そこは寺の世話人など詰めかけていましたが、その中の一人で面白い人、有難い人ですが、さて御院主さんの御安心を確かめて来ようとして行って、しばらくして帰ってきて、大丈夫、大往生だ、と云います。その世話人の話に、御院主さん苦しいでしょう、という合掌したという。苦しい顔でニコニコ笑つたと言います。それから間もなく息を引き取りました。父は暗々の内にお念仏の力、信仰の有難さを植えつけられてきたんでないかと思ひます。

母も八十六歳で亡くなり、程なく十七回忌ですが、その年の十月一日に報恩講をつとめるといので、私は帰って準備をしていましたが、母は氣分が悪かつたようですのに

庫裡の障子の切り張りをしたりして、横になって休んだりする。私は本堂の御莊嚴の道具が解らんの母にききますと、私が探すといって本堂に出て来て打敷を出しながら、「お父さんは経済は駄目な方だったが、御法は喜んだ方だったなあ」と云います。

夕食になって、丁度その時、老人会から慰安の意味で折詰が来ており、母も頂き、私も頂いて楽しく夕食をしました。しばらくするとアーッと云うようなあげる声なので、どうしましたかと問うが返事がなく、アーッと叫ぶ声なので驚き、母を呼びますが倒れたまま応えがない。一諸に数分前に食事をしたその母がもう命終っている。死んでいた母は、まあ楽だったと思いますが、私など残された者達は何となく本意ない気持ちでした。

私のために、その他の子供のために随分苦労した母、その母も必ずお浄土に参っている、私の伯父の羽湊了諦も、母方の伯父の遠山諦観もそうです。お念仏喜んで先にお浄土へ往っておる。私の死はいつか、そんなに長い時ではないでしょうが、その父母、伯父の居る所へ往きたい、そういう気持ちです。

私にとっては、そういう人々が生きた仏様である。その他足利浄円師も池山先生も白井先生も、そういう善知識の居られる所へ参らせて貰いたい、又必ず参らせてもらおうの

一条(ひとすじ)の光

田辺 昭

少し小高いところに建っていた私の家は、二階の窓を開けると、紫金色をした矢頭(やず)の靈峰が眼前にそびえて見える。麓を流れる河の両側には、落着いたただずまいの人家が建ちならんでいる静かな里で、何不自由なく仕合せにふくらんでいた私の青春は、ハンセン氏病という病気に破れ、一瞬にしてしぼんでいった。

兵役免除とした一枚の紙ぎれを手に握りしめ、窓の下を歓呼の声で送られ出征してゆく友らの凛々しい姿を見ては、病身の自分がみじめで悲しく毎夜涙を流していた。

ある日、父の前に呼び出された私に不吉な予感がはした。いつも温和な父の顔が緊張してこわばっていたからである。

やがて父は唇をふるわせるようにして「おまえの病気はまだ若いだから、きつと治る」といって「療養の手引」と書かれたパンフレットを私に示した。手にとってみるとパンフレットがところどころぬれていた。父はこれを手にも毎夜泣き明かしたのだと思った時、私は療養所行きを心に

だ、そういうことで何か気がやすまる。要するに池山先生が臨終の最後に仰言った

「何も残るものはない、何も残るものはない、唯お念仏だけが残る、ありがたいことだ、えらいことだ!」と。そのお念仏の中に皆が俱会一処する、その世界へ私も参らせて頂きたい。いつその日が襲ってくるか判らないが、生死を越えさせて頂く、そういう世界に参らせて貰う……。まことにとりとめのないことを申し上げましたがこれで失礼いたします。

向島先生のお話を終って暫く休憩して緊張をほぐし法乳に安らうことにした。

続く



決めた。

数日後、「きつと治る」といった父の言葉を信じて住みなれたわが家に後髪をひかれる想いで、離れがたいふるさとをあとに、孤独の旅に出た。

ふるさとの駅へ未練の発車ベル

昭和十五年四月十九日、私は国立療養所、長島愛生園に入園した。長島は周囲十六キロ、瀬戸内海に瓢箪を浮かべたような離れ小島である。園内には桜の花が咲きほこり、山にはつつじが赤く咲き乱れ、春たけなわであった。長い歳月を風雪に耐えて生き抜いてきた磯辺の老松と。きびしい汐風に吹き洗われ黙々と生きてきた海岸のさまざまな岩石との調和は、自然が織りなす名画ともいふべき風景であった。島の中央の小高いところに古代の建築物をおもわせるような礼拝堂が建立されている。

親と子が、夫と妻が、生き別くる悲しき病世になからしめ

ふるさとを離れ、別れてきた肉身を想っては、孤独な心を朝な夕なこの礼拝堂に来ては合掌して癒していると療友

から聞かされた。しかし、その礼拝堂も四年前に焼失して影も形もなくなってしまった。

私が入園した日は、ちょうど入園者の歌舞伎芝居「愛生座」の公演中であつた。外部からも沢山の観客があると聞いた。坂道の片側には旅芝居を思わせるような幟が数本立ち、ハタハタと音をたてていた。坂を登りきると礼拝堂の窓から下座の三味線や太鼓、鐘の音が流れてきて、いつの間にか私をふるさとの祭囃子や、母の手にひかれて見に行つた芝居のことが想い出されてきて郷愁をそそる。

郷愁の泪にくもる眼鏡拭く

「きっと治る」といった父の言葉を支えに、一日も早くふるさとに帰りたいと真剣に治療に励んだ。しかしその頃には、私の願いをよそに戦争は拡大され、年を追うごとに家からの文通もなくなり、療養所にもっとも大切な医薬品の欠乏、加えて食糧難、背に腹はかえられないと、あちこちの山を開墾した。

さらに私たち療養者にも一億国民の一人として、松根油の供出が割り当てられてきた。来る日も来る日も松根堀り松根油づくりで入園者の多くは疲労と栄養不足が重なつて毎日のように病友のむくろを焼く煙が空を灰色に染めていた。

泪にぬれた母が数珠の輪の中から呼んでいる

灰色の空から温かい母の泪が

一条の光となつて魂の器に注がれてきた

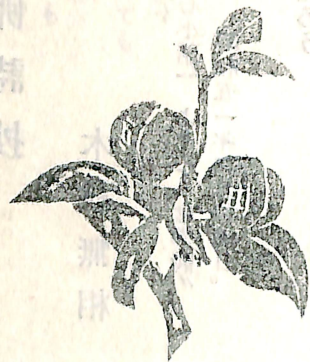
生も難く死もまた難き吾は今

母の涙にむれて生かざる

合掌

昭和五十一年三月一日発行

長島愛生園、同朋会発行「白道」誌より



昭和二十年一月、私は一夜のうちに両眼を失明した。「きっと治る」といった父の言葉も一挙に消え失せ、私のすべてが崩れ去つた。

灰色の網膜に今悲しみの泪がしたたる

唇は氷のように冷たく凍え

毛穴は鳥肌のように逆立ち

不安と孤独の恐怖にふるえる

絶望の泪が碧黒くよどんだ死の海にひろがり

刻々とじぶんに向つてくる

死の恐怖にふるえる沙騒

形なき水にこだまする魂の叫び

彼方にひろく私を呼んでいる母の声

「癩」

明石海人

十年前 隣人が

私の生存をにくんだ

五年前 はらからが

今では 自分自身が

のこるはただ一人の母親だが

なみだながらに生きて居よといふ

海人氏は療養所に入園後、絵を描くことに唯一の喜びを持つていたが、突然失明。生きる望みを失つて自暴自棄におちた時、悲母のまことの涙にふれた。そこに母の願いを唯一の光と仰いで生きる道がひらけた。すると眼は見えなくても耳があった。小鳥の声、波の音が聞こえる、そこに音楽があり、歌があり、詩があった。一日一日を大切に惜しみつつ母の願いに支えられて寿命を完うした。

念佛詩抄

木村無相

禿義峰御老院『安心小話』よりの『念佛詩』

昭和五年二月二十七日。

なぜだろう

半六の母つねに曰く

なぜだろう

なぜだろう――

こんなものに

こんなことが

聞こえたのは

なぜだろう

なぜだろう――

こんなものとは

わたしのこと

こんなこととは

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

それが證拠に

江州稲葉の妙慰曰く

〃わたしが忘れるで

アナタ（如来さま）が

忘れておくれぬ

わたしが離れるで

アナタが離れておくれぬ

わたしが思わぬで

アナタが思はずめにして

くださる――

それが證拠に

ナムアミダブツ

行住坐臥もえらばれず

ハラが立つにつけても

ナムアミダブツ

欲がおこるにつけても

ナムアミダブツ

六字の仰せ

なぜだろうとは

聞こえのフシギ

フシギ フシギの

ほかはない

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

仰せギリ

一蓮院師仰せに

〃仰せだけで安心して

しまうのが

深くてのんだのじゃ

仰せというは

ナムアミダブツ

そのまま救うが

六字の仰せ

仰せギリ

おとどけギリ

となえあらわれ下さるる

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

タノムというは

一蓮院師仰せに

〃弥陀をタノムというは

本願の月にむかいに

なりて

我が心をながめぬなり

ながめても

ながめ甲斐なき

わがこころ

本願の月

あおくほかなし

ナムアミダブツと

あおくほかなし

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

こればこるほど

江州磯の与市曰く

〃バクチ打ちと

後生願いは

こればこるほど

ハダカになる〃

ハダカになって

ハダカにされて

生れたキジで

ナムアミダブツ

ミダたのむより

ほかはない

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

どこまでいつても

開華院師仰せに

〃どこまでいつても

弥陀に助けられて

往生するぞと信じて

念佛するよりほかはなし〃

どこまでいつても

地獄一定

どこまでいつても

アミダ一定

ただ念佛のほかはなし

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

○

(近信) 三月十八日、

われこそは闡提なりの

おたよりに

涙しせまる我れも

しかれば

(無相)

私が問題である

花田正夫

一、私の問題

私共は種々な問題を抱えている。或は難病に苦しみ、或は家庭の不和を歎けき、或は子を亡くして悲しみ、或は家の貧しいのを憂えて、その解決にあらゆる努力を続けている。そして自分が持っていないものを持つ人々を羨しがって、ああなれたら、こうなれたら幸せだろうと夢みているけれど、有名なカール・ブッセの詩に

山のあなた

山のあなたの空遠く

「幸」住むと人のいう。

ああ、われひとと尋(と)めゆきて

涙さしぐみかえりきぬ。

山のあなたになお遠く

「幸」住むと人のいう。

とある。牧水の歌にも

幾山河こえさり行かばさびしさのはてなんくにぞ

今日も旅行く

とある。これも他人事と眺めている時はよいが、自分がその渦中にあると知らされたら堪ったものではない。

ここに、走り廻る足をとめて、先ず大思一番せねばならない。佛陀は「人生は苦であり、その原因は内なる煩惱にある」と教えられる。身近な例でいえば、五十過ぎるとよく眠れない日がある。そうした時は隣家のテレビやラジオが喧しく、それがやむと枕元の時計の音が耳につき、更に台所で騒ぐ鼠の音が邪魔になるが、この様に外界の事情がどう変わっても、新しい苦が次から次へとつきまとう。そこで何よりも肝腎なことは、苦になる自分自身の解決を先にせねばならぬと知らされる。

二、私が問題

釈尊の七十三の時、王舎城に悲劇がおこった。その渦中であって、イダイケ夫人は釈尊に救いを求めた。この時、イダイケ夫人は、悪逆の子アジャセの心を和らげて下さいとも、夫君のビンバシヤラの生命をたすけて下さいとも申し上げていないで、私を救うて下さいとお願ひしている。私共の一般の考えからは、アジャセ王をどうしたら改心させることが出来ましょうか、又夫を救う道はどうしたらよろしいか、とお願ひし勝ちである。即ち私の問題をどうしたらよくすることが出来ましょうかと願ひ勝ちであるが、その渦中に行き詰っている私が問題であると気付かない。

イダイケは長年佛陀の慈育をうけていた甲斐があって、自分以外の処置でなくて、自分自身を問題にして、その解決をお願いしたのである。

和国の教主と親鸞聖人がお慕いになった聖徳太子は、お年二十にして太子に選ばれ、女帝推古天皇につかえ、横暴をきわめる閥族の蘇我馬子と国政を執られるに当って、大難関に遭われたのである。その時、太子御自身の解決を求められて慧慈慧僧を師として佛道を学び、三十になられた頃に佛法の玄意を獲られ、先ず亡き父君の用明天皇の大法要をいとなみ、人材登用の道として冠位十二階を定め、次いで国是の中心として十七憲法を發布せられたのである。昔から「波聞路なく、道縦横」と云われるように、自身自身の眼が開けば、処すべき道は自然に無理なく開けて来る、大切なことは、自分自身の開眼である。

三、実際の例 (一)

K夫人は、高校を出た一人息子が大学の入試に失敗してから脱線しはじめ、手におえぬまでにすさんで行った。そこでどうしたらよいかを懇意な人々に相談もしたが、思うにまかせなかった。こうした或夜、帰りのおそい子等待っていたが、夜更けに酔いしれて帰ったので、今夜こそはと話をしかけたところ、うるさい！と云いすててゴロンと横になって高聲きをはじめた。

そこで手当り次第に、禅寺をたずねて坐禅したり、或はキリスト教の有名な人の話を聞きにいったりしたが、どこもここも思うにまかせなかった。その失望の底にあった時、新聞に求道会館の落成が広告され、その中心の近角先生の経歴などが出ていたのに心ひかれ、或日先生を訪うて、苦衷を訴えた。これを満腔の同情をもって聞きとられた先生から「かかる業苦にあえぐ私共のために弥陀仏の御本願が発起されたのです」と懇ろに聞かされ、不思議にも心が晴れ晴れとして、佛様の味方があればドモリを笑わば笑えたと云う広い心になった。そうこうしているうちに、又してもその心構えが崩れて元の本阿弥になってしまった。

Sさんは落胆して再び近角先生に「矢っぱり駄目でした。ドモリがなおりません」と訴えた。すると近角先生が強く「ドモリが治ると誰が云いました。そういう業報をもってドモリがやまぬ者を何処までも不惑、可愛相と見て下さる方がましますのです」と、叱るように答えられた。

ここでSさんは始めて、自分の間違いに気づき、自分が佛法をきいていたのはドモリを治したいためであった。これでは自分の煩惱を満足させるために佛様を拝んでいたの、全く佛様を冒瀆していた、申しわけがないと、大転換されて、「障り多きに徳多し」で、ドモリがやまぬにつけては、南無阿弥陀仏となり、これが佛法に引きもどされるよ

K夫人は思いあぐんで、そこに坐りこんだ時、フトお念佛がうかんだ。すると、次に「子が云うことをきかなくなつたのも数月前からであるが、自分自身は久遠のみ親の佛様にそむいて長い間すこしてきた。不孝者だと子を責めているが、自分こそ大不孝者であった」と氣付き、しきりにお念仏が浮かんだ。すると子を責める心が消えて、この子こそ自分のあさましさを知らしてくれる鏡であったとなつて、その夜は久し振りにグッスリと眠ることが出来た。

次の朝早く起きて朝食の準備をしていると、起きて来た子がいつになく、すなおになつて、「夜おそく帰って心配かけたなあ！」とわびた。

親が子を責める心が消えると、不思議に子はおだやかな心にかえつたのである。そこで自分自身の解決が緊急事であると深く氣づかれたのであった。

四、実際の例 (二)

Sさんは学生時代からドモリを苦にして、矯正の施設にも度々入ったが、一寸よくなったたようでも何かのキッカケから駄目になり、水面に字を書くようなはかなさであった。或日高い山に一人で登り、猫子一匹も居らない頂上で、話してみるとドモラないので、結局ドモルと人が笑うのが苦になつて緊張してよけいに失敗するのだから、人が笑っても苦にならない人間になろうと願つた。

い御縁となつた。

七十すぎになられた時、拙庵を一二度お訪ね下さったが、その時もドモリは続いていたけれど、ドモリはドモリとしてうけて、それにひっかからないで念仏していられた。

以上Sさんの場合は、自分の問題に行きつまり、自分自身がしつかりしたらと自分を錬えようとして、ここにも又行きつまりとなり、最後にドウにもコウにもならぬ自分が問題となつて、本願のまことを仰がれるようになったのである。

五、むすび

私共は、眼に近い眼鏡を平素に忘れてすごしているように、自分自身の問題に心身を消耗しているが、そこはどうどうめぐりで解決の光はない。根本の解決は自分自身が問題となつてひらける。他力の金剛信の人は皆そこを超えている。そこに「念仏は一人居てよろこぶ法なり」の無碍の白道がある。池山先生の句の

ひとり居てよろこぶ声や明けやすし
とはその妙境である。

「往生は一人一人のしのぎなり、一人一人仏法を信じて後生たすかることなり」との蓮如上人のお勧めもこのことである。

あとがき

「春光に豚も人も嬉々として」とは故、佐藤強三郎翁の句であります。新濁の人で、長くきびしい冬から解放せられた喜びのあふれたものであります。私もかつて「春光のようやくしみて初蛙」と駄句を書いて、念仏の浮かぶ喜びを述べたことがあります。

「賢にあえばおのずとゆたかなり」と聖徳太子も云われているが、最近見るもの聞くものに心のこわばることの多いにつけ、佛願を仰ぎ、佛心に浴する時、心のやわらぎを思まれ、心の黎明をむかえ、行くべき道が自然に照し出されてまいります。「夫れ三宝によりまづらずば何をもつてか柱（まが）れるを直うせん」との太子の勧めにうなづかされることであります。

★ ★ ★ ★

近角先生の真宗教証は、「親鸞聖人の信仰」の附録にあります。鹿兒島の法山龍天さんの御希望もあつて頂きました。福島先生の「久遠」は旧著「こころ」から転載、御遺徳をしのぶようすがにさせて頂きました。

西元宗助様の原稿は、自照誌の三月号に出されたものから転載させて頂きました。

福島先生を失いましたことはまことに惜しまれてなりません。

一道会の記では、京都産業大学の向島教授の信味を頂きました。喜寿の年も過ぎられて益々お元気でありました。田辺昭（匿名）さんは長島の愛生園にあって、失明の身で、音楽に詩に、遇法の喜びをたたえて居られます。同じ失明者の毎川さんと肝胆あてい照しての信の歩みを続け、異彩を発揮していられます。

木村さんは、北陸にも春を迎え、老いの腰をのばされた模様です。今回は禿義峰老師の「安心小話」よりの詩を送って下さったものです。

私の稿は、目が外に向いているように、心も外にばかり向いて、そこに解決の道を求めますが、その基底に「私が問題」という一点を述べました。

分け入っても分け入っても青い山の山頭火の句を掲げ、煩惱無尽、佛意無量、大道無窮、等々を連想しております。

〔御案内〕

○ 一道会例会、毎月、第一、二、三、日曜、午后一時半。南区駈上町二の八八一道会館。

市バス、新郊通り二丁目下車。地下鉄新瑞橋終点下車。

○ 教西寺法話会。毎月二十四日、午前午后昭和区小機町三丁目四番地。

市バス、北山町、又は御器所通り下車

★ ★ ★ ★

○ 今月から定価を上げさせていただきます。花田

定価	半年 七〇〇円（送共）
	一年 一四〇〇円（送共）
編集・発行人	名古屋市南区駈上町二ノ八八 花田 正夫
電話	八二一局七〇三七番
印刷	愛知県西加茂郡三好町大字福谷 坂部 光雄
発行所	名古屋市南区駈上町二ノ八八 慈光社
振替口座	名古屋 一〇四七〇番
郵便番号	四 五七